

株主のみなさまへ

第19期中間報告書

2016年4月1日～2016年9月30日

株式会社トランスジェニック 証券コード 2342



一人ひとりの健康と豊かな暮らしの実現をめざして



株主の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。
平素より格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。
さて、第19期中間事業報告書をお届けするにあたり、ご挨拶申し上げます。

当社は、「生物個体からゲノムにいたる生命資源の開発を通して、基礎研究及び医学・医療の場に遺伝情報を提供し、その未来に資するとともに、世界の人々の健康と豊かな暮らしの実現に貢献する」ことを目指しております。

この経営理念に基づき、当社グループは基礎研究から非臨床、臨床、更には病理診断まで網羅した幅広いサービスを研究機関・製薬企業等に提供しております。

我々は、この幅広いサービスラインを強化すべく特異性・差別化が高い技術・サービスを有するバイオベンチャーとの資本提携を昨年から今年にかけて積極的に実施してきました。これらの先行投資については、今後、中長期における当社グループの発展の過程において、その投資効果が発揮されてくるものと考えております。

また、上記の戦略的取り組みを進める一方で、既存事業の状況としましては、後ほどご説明いたしますとおり、このプラットフォームを活用した営業強化及びグループ連携強化、並びにこれら事業運営に対する管理体制強化の成果が実りつつあります。当社グループの売上高は、季節的変動が著しく、下半期に売上高が集中する傾向がありますが、売上基盤の底上げと利益率改善により、上半期で営業損益分岐点を突破できる構図となってまいりました。これは、黒字体質定着を背景とした拡大再投資による更なる事業基盤拡大が具現化しているものであり、今後も継続してまいります。

株主の皆様におかれましては、当社の取り組みにご理解をいただき、なお、一層のご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

2016年12月
代表取締役社長 福永健司

Q1 当第2四半期連結累計期間(当中間期)の業績について概要をお聞かせください。

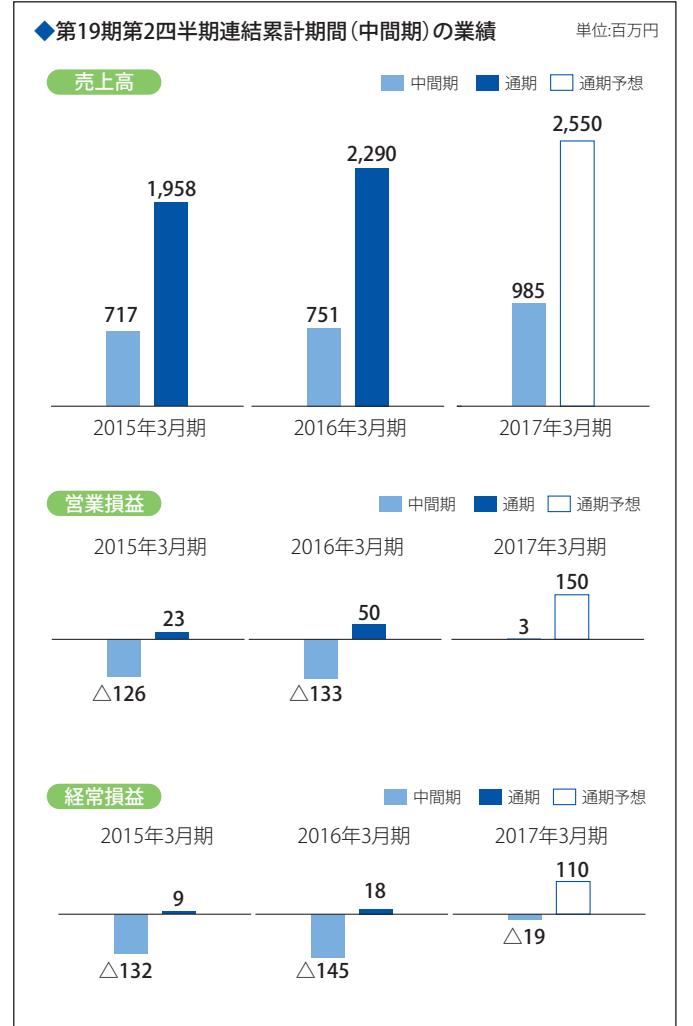
A1 当社グループは、当第2四半期連結累計期間において、黒字化定着を受け更なる拡大に向けてグループ会社の設備投資、研究開発活動を活発化させました。また、将来的な事業基盤強化の布石として新規事業への戦略的な投資を実施いたしました。この結果、当第2四半期の連結累計期間における当社グループの業績は、売上高985百万円(前年同期751百万円)と前期比31.1%増の大幅増収となりました。損益に関しましては営業利益3百万円(前年同期営業損失133百万円)となり、上場来初の第2四半期連結累計期間での営業損益の黒字転換を果たしました。経常損失に関しましては、持分法損失の計上等により19百万円(前年同期145百万円)、親会社株主に帰属する四半期純損失22百万円(前年同期104百万円)となりましたが、対前年同期比で大幅改善となりました。

セグメント別業績状況は、ジェノミクス事業につきましては、ゲノム編集技術(CRISPR/Cas9)による遺伝子改変マウス作製の受注が増加し売上高182百万円(前年同期比23.0%増加)、また事業運営の効率化により営業利益52百万円(前年同期0.8百万円)と大幅増収増益でした。

CRO事業につきましては、繰越受注残の増加、積極的な営業活動により、売上高485百万円(前年同期比81.1%増)、営業利益82百万円(前年同期営業損失25百万円)と大幅増収及び黒字転換の結果となりました。第3四半期以降の売上となる受注残高についても、前年同期と同水準を確保しており、引き続き受注強化を図り通期売上高・黒字幅の拡大を目指してまいります。

先端医療事業につきましては、大口案件の売上が遅延し売上高123百万円(前年同期比10.3%減)、事業拡大に向けた機器投資・増床コストにより営業損失43百万円(前年同期25百万円)と減収減益となりました。今後は創薬支援サービスの受注に注力し業績回復を図ります。

病理診断事業につきましては、202百万円(前年同期比0.5%増)と堅調に推移しましたが、人員増加、増床コストの増加により営業利益6百万円(前年同期19百万円)と減収減益でした。今後は新規サービスである自己採取HPV検査の普及に注力し業績拡大を図ります。



Q2 業績は好調に推移していますが、今後の経営における重要課題についてお聞かせください。

A2 通期業績目標として、売上高は前年比約11%増の25億500万円、営業利益は約3倍の1億5000万円を設定しておりますが、ここまでは計画通りに進捗・推移しているものと見ております。通期業績及び来期への展望を確保するためには、この拡大トレンド維持が重要な経営課題であり、この課題克服のためには優秀な人材確保に加え、最先端サービスを継続的に提供するための最新技術の導入及び研究機器をはじめとする継続的な設備投資が必要不可欠と考えております。

また、当社グループの創薬支援サービスは特異的サービスの提供を通じて差別化及び成長力を保持しておりますが、既にグループの骨格は完成し必要に応じた投資を適時行うことで自立拡大していく局面に移りつつあります。今後、我々が更なる成長を実現するためには、この流れの中で新たな成長分野への進出を目指すのか、あるいは、創薬支援グループの抜本的拡大へ向けた投資を行うのか、戦略的な意思決定をすることになると考えております。

Q3 通期業績予想の見直しについてお聞かせください。

A3 第2四半期連結業績及び足元の受注動向は順調に推移しており、通期業績予想達成に向けて最後の追い込みをかけているところです。当社グループの損益モデルは極端な下半期偏重型で上半期赤字を下半期黒字でカバーするイメージなのですが、売上高の底上げにより上半期で営業損益分岐点は既に突破しています。下半期業績すなわち、下半期における売上及び黒字を確実に確保することで当年度予想は十分達成可能です。好調の要因としては、当社基幹事業であるジェノミクス事業に関して、CRISPR/Cas9の浸透の影響により同技術を用いた受託作製が増えてきていること、CRO事業部門に関しては完全に黒字体質に転換しており、拡大再投資により攻撃的に受注が増えてきていることが挙げられます。現時点においてこの傾向に変更はなく、下半期も同様の展開になるとみています。先端医療事業及び病理診断事業に関しては増床、人員補強と売上増のタイミングが合わずに上半期は減

益となりましたが、下半期以降、先行投資回収の段階に移行すると予想しています。

前述のとおり事業環境としては強気で見ているところではあります。今後の受注動向に大きく影響されますので、現時点での業績予想については据え置いている状況です。

単位:千円	2016年 3月期 (実績)	2017年 3月期 (予想)	増減額	ご参考		増減額
				前上期実績	当上期実績	
売上高	2,290,287	2,550,000	259,712	751,584	985,669	234,084
ジェノミクス事業	395,050	450,000		148,010	182,125	
CRO事業	1,099,367	1,220,000		268,104	485,576	
先端医療事業	391,779	440,000		137,605	123,482	
病理診断事業	413,778	460,000		201,660	202,736	
本社・連結調整	▲9,687	▲20,000		▲3,796	▲8,251	
営業費用	2,239,874	2,400,000	160,125	884,870	982,203	97,332
営業利益	50,413	150,000	99,586	▲133,285	3,465	136,751
経常利益	18,959	110,000	91,040	▲145,310	▲19,449	125,861
親会社株主に帰属する当期純利益	14,587	65,000	50,412	▲104,990	▲22,730	82,260

Q4 最後に株主の皆様へメッセージをお願いいたします。

A4 当第2四半期の概況についてご説明しましたとおり、当社グループは黒字体質定着からその拡大・強化へと着実に進化・発展しております。

当社経営理念の実現のためには、まだまだ当面は高い成長率の維持と利益拡大、すなわち、中長期経営計画の実現が必要であり、その実現を通じて当社企業価値の最大化が図れるものと考えております。

当社は「研究開発型ベンチャー」として、今後も、様々な取り組みに対して迅速かつ的確な意思決定に基づき挑戦し、グループ全社員一丸となり目標達成に邁進する所存です。

株主の皆様方におかれましては、引き続きご支援ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

グループ会社 (株)ジェネティックラボの事業運営効率化を目的とした部門集約および事業拡大のために増床

増床後面積:1,857㎡(従来面積1,160㎡)

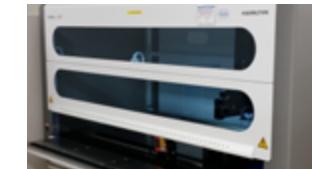


意思疎通を強化し、機動的な現場運営を実現するため、先端医療事業部、品質管理部、営業部を集約



自己採取HPV*検査事業拡張に備えたエリア確保

*HPVとは、ヒトパピローマウイルス(Human papillomavirus: HPV)というウイルスです。HPVには100以上のタイプがあります。そのうちハイリスク型HPVというものが子宮頸がんの原因になると考えられています。



自己採取HPV検査事業拡張に備えたHPV核酸抽出装置、子宮頸がん検査に用いられるコバス4800システムの設置

先端医療事業の事業拡大に向けた機器投資



治験、臨床研究でのcell free DNA(cfDNA)*解析に用いられるdPCRの購入

*cfDNAとは血液中を循環しているDNA断片で、がんの進行にともない、がん細胞から放出される割合が増加することが報告されております。このcfDNAの変異やコピー数を解析することによって、がん診断への利用が期待されています。

グループ会社 医化学創薬(株)の本社移転

営業の一体化、経営管理の効率性、研究開発の迅速性を確保するために、北海道大学インキュベーション施設から、ジェネティックラボ増床を契機に増床部分の一部に医化学創薬(株)の本社・研究所を移設。



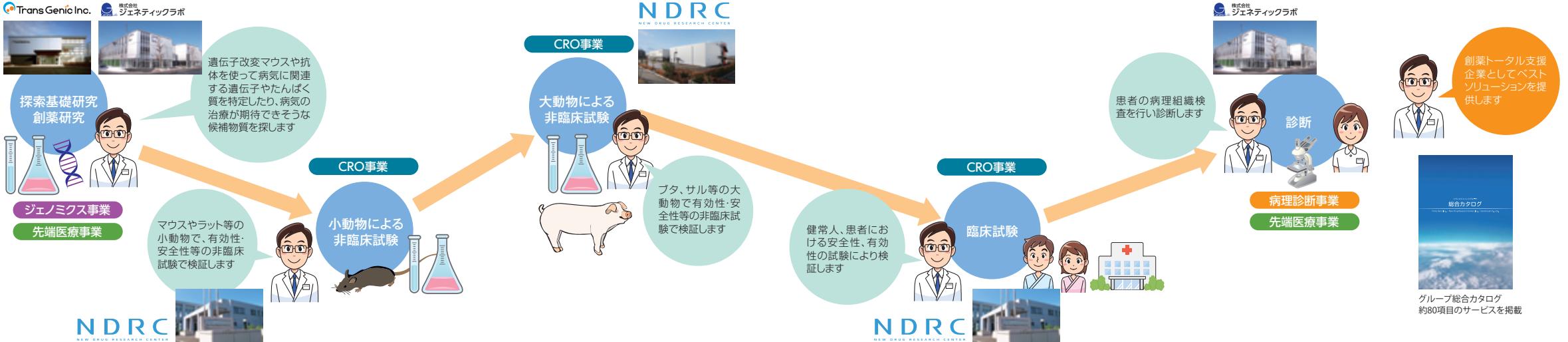
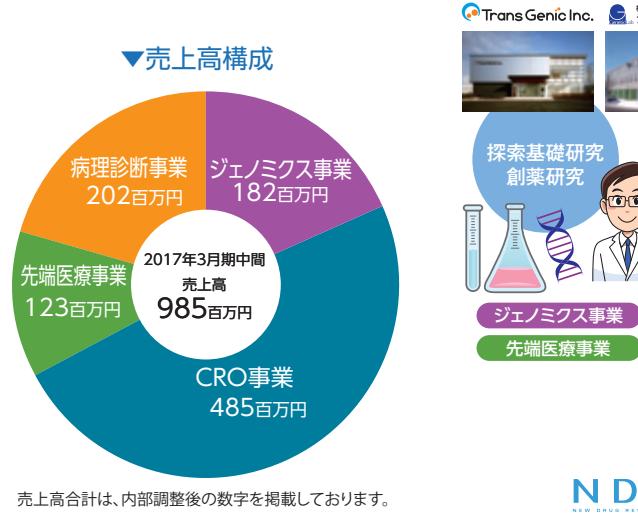
研究員執務室エリア



LibertyBLUE:
糖ペプチド、ペプチドの自動合成装置



HPLC:糖鎖や糖ペプチド、ペプチドの解析、精製装置



ジェノミクス事業

当中間期概要

- ▶ゲノム編集技術(CRISPR/Cas9)浸透による需要拡大が売上高拡大を創出
- ▶売上高増の一方で技術習熟、作業効率化により営業費用が減少した結果、営業利益は大幅増加

ジェノミクス事業においては、コンベンショナルノックアウトマウス、コンディショナルノックアウトマウス、ノックインマウス、トランスジェニックマウスなどの遺伝子改変マウスの作製受託のバイオニアとして市場を牽引し、実績と信頼を蓄積し、最新技術導入により、作製期間の短縮、高い成功率を実現しています。さらに、新しい研究ツールとして、各種病態可視化マウスなどの有用なモデルマウスの提供を行っています。また、CRO事業との連携により、GLP施設での遺伝子改変マウスを用いた非臨床試験受託も可能であり、当社独自のサービスとして優位性を図っています。研究開発の一環として、遺伝子改変マウス作製技術を基盤技術とし、組織・臓器レベルでのヒト化マウスの研究開発に取り組んでいます。

また、GANPマウス技術を基盤とした高親和性・高特異性モノクローナル抗体作製をはじめとするタンパク関連受託、試薬販売等のサービスを提供しています。さらに、外部研究機関と共同で各種がんマーカー、メタボリックシンドロームなどの診断薬シーズの研究開発にも取り組んでいます。

ジェノミクス事業は、創薬プロセスにおける、標的分子探索および標的分子の同定の支援を行っています。

売上高 (単位:千円)

2016年3月期中間	148,010
2017年3月期中間	182,125

売上高34百万円 (23.0%) 増加

営業利益 (単位:千円)

2016年3月期中間	887
2017年3月期中間	52,627

営業利益は51百万円増加

CRO事業

当中間期概要

- ▶繰越受託残の増加(275百万円)が上期売上高の大幅増加に直結
- ▶上記の結果、下期偏重型ながらも上期で損益分岐点を大きく突破

CRO事業においては、GLP及びGCP遵守の受託研究機関として、小動物、遺伝子改変マウスを用いて幅広い薬効薬理試験、安全性薬理試験、薬物動態試験などの非臨床試験受託を行うとともに、霊長類を用いた非臨床試験受託も行い、幅広く顧客ニーズに対応しています。

薬効薬理試験においては、各種動物を用いて病態モデルを作製し、医薬品、ジェネリック医薬品の生物学的同等性試験、医療機器、特定保健用食品の評価等の評価を実施しています。霊長類を用いた安全性薬理試験、各種動物を用いた薬物動態試験など、長年の実績に裏打ちされた高品質な多種多様な非臨床試験受託を取り揃え、高いコンサルティング力により、顧客へベストソリューションを提供することで評価されています。

CRO事業は、創薬プロセスにおける、リード化合物の探索と最適化、非臨床試験、臨床試験の支援を行っています。

売上高 (単位:千円)

2016年3月期中間	268,104
2017年3月期中間	485,576

売上高217百万円 (81.1%) 増加

営業利益 (単位:千円)

2016年3月期中間	△25,764
2017年3月期中間	82,156

営業利益は107百万円増加

先端医療事業

当中間期概要

- ▶大口案件に関する臨床検査確保が遅れ、売上が下期に遅延し減収
- ▶事業拡大に向けた機器投資・増床コスト負担も重なり営業損失拡大
- ▶先行投資を回収すべく下期以降の受注拡大に注力

先端医療事業においては、遺伝子解析受託サービス、遺伝子解析技術と病理診断技術を融合させた分子病理解析、タンパク質定量解析等を提供し、個別化医療に向けた創業支援を行っています。特に分子病理解析は、製薬企業の需要が高く、技術力に裏打ちされた質の高いサービスとして評価されています。また、現在重要な研究領域であるiPS細胞や幹細胞、癌幹細胞などの細胞レベルでの遺伝子、タンパク質解析、さらには1分子レベルの解析など、研究者の求める先端的な研究をサポートする基盤技術の確立を進めています。

先端医療事業は、創薬プロセスにおける、標的分子の同定、臨床試験の支援を行っています。

売上高 (単位:千円)

2016年3月期中間	137,605
2017年3月期中間	123,482

売上高14百万円減少

営業利益 (単位:千円)

2016年3月期中間	△25,145
2017年3月期中間	△43,723

営業損失は18百万円拡大

病理診断事業

当中間期概要

- ▶高品質サービス体制維持により売上高は堅調に推移
- ▶自己採取HPV事業拡大に向けた人員増及び増床コスト負担により上期は減益
- ▶自己採取HPV事業売上高は取扱医療機関の増加に応じ順次売上拡大を予測

病理診断事業においては、年間数十万件の病理細胞診を実施している経験豊かな認定病理医がグローバル基準の認定(CAP)施設で質の高い病理組織診断、乳がんや胃がんのバイオマーカーを用いた解析、組織アレイ作製、特異抗体を用いた免疫染色・FISH法による分子の可視化技術や定量評価など、臨床における病理診断を行っています。将来的に、個別化医療の中心となるがん領域、炎症性疾患領域において豊富な病理診断実績を有し、遺伝子解析との技術融合による試験受託は製薬企業ニーズに応えるもので、個別化医療関連の創業における優位性を有しています。また、子宮頸がん検出率向上を目的として液状細胞診とHPV核酸検出検査の併用に取り組んでいます。

病理診断事業は、創薬プロセスにおける、臨床試験の支援を行っています。

売上高 (単位:千円)

2016年3月期中間	201,660
2017年3月期中間	202,736

営業利益 (単位:千円)

2016年3月期中間	19,892
2017年3月期中間	6,371

営業利益は13百万円減少

◆研究開発方針

基礎研究支援から、臨床試験支援までを包括する事業を展開し、さらなる発展のための研究開発を実施しています。研究開発の一つの目標は、拡大した各事業間の連携による既存事業のさらなる強化と新規事業の展開です。そのため、有用な新規技術および新規モデルマウスの開発および導入、そのモデルのCROへの展開、新規技術を用いた事業展開、診断薬シーズ探索の拡充のため、大学等研究機関との共同研究を展開し、将来的な収益化につながるプロジェクトに経営資源を投入します。

◆研究開発トピックス

4月	GANP [®] 蛋白質の機能に関する論文が『Advances in Immunology』に掲載
	酸化ストレス可視化マウスに関する特許が欧州にて成立
5月	ライフサイエンスワールド2016(第15回国際バイオテクノロジー展)に出展
7月	第39回日本神経科学大会に出展
	酸化ストレス可視化マウスに関する特許が日本にて成立
	尿中ジアセチルスベルミン濃度測定受託サービス開始*
8月	cell free DNA (cfDNA) の受託解析サービス開始*

*当社グループ会社 ジェネティックラボ

■ 特許
 ■ 製品・サービス
 ■ 学会・論文

◆研究開発パイプラインの進捗状況

当社は、3つの研究開発パイプラインを進めてきています。

1. 遺伝子改変マウスの作製技術

可変型遺伝子トランプ法を契機として、その後はES細胞を用いた相同組換え技術、遺伝子導入マウス作製技術の効率化を達成してきました。最近では、ROSA26座位での組換え技術、そしてCRISPR/Cas9法も実用化しています。さらなる新規技術の開発に積極的に取り組んでいます。

2. モデルマウス系統の開発

大学等の研究機関で作製された、あるいは共同研究等により作製されたモデルマウスを積極的に導入しています。その結果、これまでに、病態可視化マウス、がん等の疾患モデルマウスの販売を開始しています。また、モデルマウスの販売にとどまることなく、CRO事業への展開を見据えたモデルマウスに重点を置き、特に肝臓ヒト化マウスの開発も行っております。

3. 抗体製品の開発と応用

GANP[®]マウス技術を用いて作製した抗体や外部研究機関から導入した様々なシーズをバイオマーカーとして診断薬へ展開するよう研究開発を進めております。バイオマーカー開発パイプラインの充実を図ることで、抗体事業のブランド力を高めて参ります。

◆開発パイプライン状況

遺伝子改変マウスの作製技術

- ROSA26座位での組換え → TG社 → 実用化済
- CRISPR/Cas9法 → TG社 → 実用化済

モデルマウス系統の開発

自社または外部研究機関からの導入開発

モデルマウス	開発元	進捗
小脳体ストレス可視化マウス	理研	販売中
酸化ストレス可視化マウス	群馬大学	販売中
炎症可視化マウス	群馬大学	販売中
乳がんモデルマウス	九州大学	販売中
夜型モデルマウス	産総研	販売中
肥満抑制モデルマウス	TG社	販売中
アトピー性皮膚炎モデルマウス	兵庫医科大学、三重大学	→
認知症モデルマウス	有限会社行動医学研究所	→
うつ病モデルマウス	産総研	→
肝臓ヒト化マウス	熊本大学・TG社	→

抗体製品の開発と応用

約3年: ターゲット同定 → 抗体作製 → 有用性検証 → 測定系構築 → ライセンスアウト臨床開発 → 約2年~: 上市

抗体製品	開発元	進捗
抗体製品の開発と応用	外部研究機関からの導入開発	→
肝臓がんマーカー	アボット社	日本、欧州で上市
尿中がんマーカー	九州大学等	上市に向け進行中 (国内診断薬メーカー) ※中国企業での臨床試験実施中
膵がんマーカー	国立がんセンター	ライセンス先交渉中 追加データ蓄積中 測定キット販売中 ※株免疫生物研究所と共同研究 ※中国企業と独占ライセンス契約締結
泌尿器がんマーカー	順天堂大学	測定キット販売中 ※中国企業と独占ライセンス契約締結
メタボリックシンドロームマーカー: AIM	東京大学	測定キット販売中
うつ病マーカー	産総研	測定キット販売ライセンスアウト交渉中
卵胎機能マーカー	聖マリアンナ医科大学	抗体作製中

Intellectual Property Report

〈知的財産戦略の方針〉

当社は、探索研究をしている製薬企業や疾病解明に取り組む研究者へ、有益な研究ツール、知的財産を提供することにより、創薬、病態の解明に貢献したいと考えております。

また、当社は、大学・研究機関等との共同研究を積極的に行い、当事業とシナジー効果が発揮でき得る技術を、研究開発の早期段階において導入することに努めております。研究開発の早期段階での技術導入により、その技術が公開される前に確実な知的財産権を確保するとともに、豊富な実験データに裏付けられた強い特許、将来のマーケティングを見据えた特許網を構築すべく、研究開発、事業戦略と融合させた特許戦略を展開しております。さらに、導入した技術を付加価値の高い技術や知的財産に育て、これらの技術から生まれた独自性の強い製品・サービスを提供するとともに、知的財産、技術情報のライセンスビジネスを展開しております。知的財産のライセンスについては、製薬メーカーなどの開発・事業のステージにあわせたマイルストーンを設定することにより、戦略的な知的財産の活用を努めております。

〈特許・ライセンスの事業への貢献〉

当社特許の事業への貢献度は高く、当社は保有特許の極めて高い実施率を保持しております。また、積極的なライセンスイン、ライセンスアウトを通じて、直接的な収入の増加のみならず、事業の優位性を図り、将来を見据えた中長期的な知的財産戦略を実行しております。

〈リスク対応情報〉

2016年9月末時点において、当社に対する特許訴訟やクレームはありません。当社は、自社技術が他社の特許侵害に当たらぬよう、リスクマネジメントに努めております。

◆主な特許成立マップ

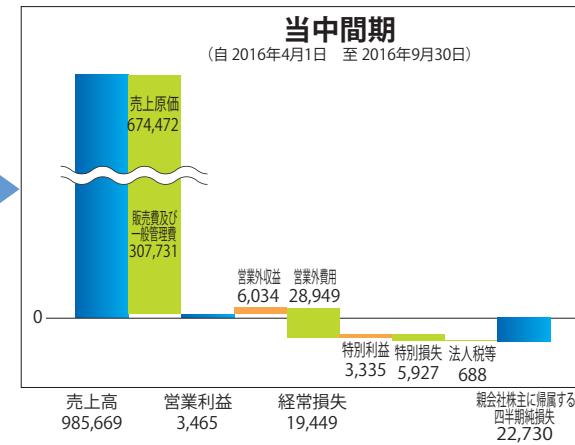
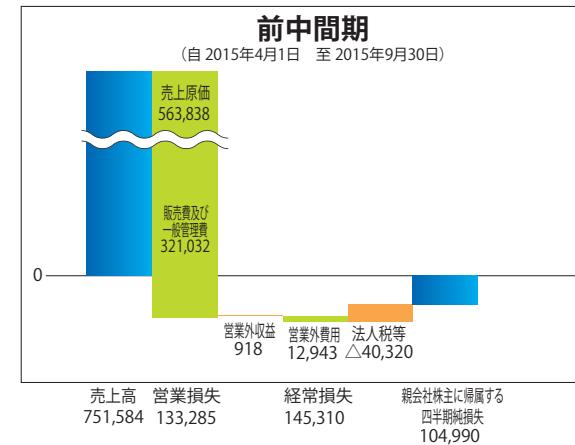
トランスジェニックの特許群は、トラップ技術関連、GANP[®]マウス技術関連、腫瘍マーカーなどが事業の根幹となっています。これらの知的財産をもとに、国内外の複数の企業とライセンス契約を積極的に進めてまいります。

- トラップ法関連特許 日本、米国、欧州、豪州、中国、香港
- 尿中がんマーカー関連特許 日本、米国
- 腫がんマーカー特許 日本、米国
- GANP[®]タンパク質特許 日本、米国、カナダ
- GANP[®]マウス関連特許 日本、米国、欧州、豪州、中国、韓国、香港
- 胆管がんマーカー特許 日本
- タンパク質高発現系技術特許 日本
- ヒト化マウス特許 日本
- 臓器ヒト化マウス特許 日本



Financial Information

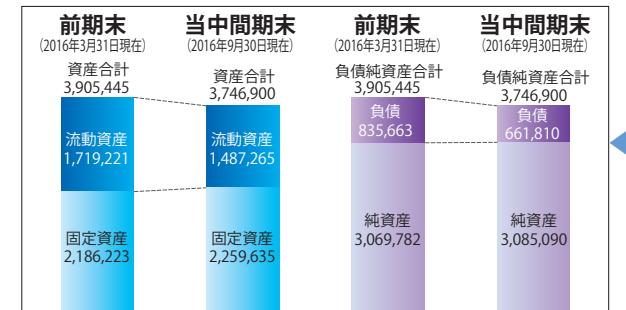
損益計算書より (単位:千円)



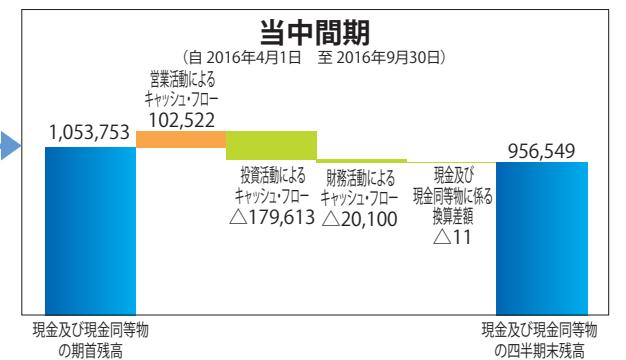
Point 1

当中間期における売上高は985,669千円(前年同期比31.1%増)、営業利益は3,465千円(前年同期は営業損失133,285千円)、経常損失は19,449千円(前年同期145,310千円)、親会社株主に帰属する四半期純損失は22,730千円(同104,990千円)となりました。

貸借対照表より (単位:千円)



キャッシュ・フロー計算書より (単位:千円)



Point 2

当中間期末における流動資産は1,487,265千円となり、前期末比231,956千円減少しました。これは主に仕掛品が64,664千円増加した一方、現金及び預金ならびに受取手形及び売掛金がそれぞれ97,203千円、198,619千円減少したことによるものです。固定資産は2,259,635千円となり、前期末比73,411千円増加しました。

Point 3

営業活動によるキャッシュ・フローは102,522千円(前年同期は△114,796千円)となりました。投資活動によるキャッシュ・フローは△179,613千円(同△120,795千円)となりました。財務活動によるキャッシュ・フローは△20,100千円(同△73,508千円)となりました。その結果、当中間期末における現金及び現金同等物は、前期末比97,203千円減少し、956,549千円(前年同期間末1,037,085千円)となりました。

会社概要 2016年9月30日現在

会社名	株式会社トランスジェニック
設立	1998年4月
資本金	2,718百万円
従業員数	31名(単体) 137名(連結)
事業所	
本社	福岡県福岡市中央区天神二丁目3番36号
神戸研究所	兵庫県神戸市中央区港島南町七丁目1番地14
東京オフィス	東京都港区虎ノ門二丁目7番5号

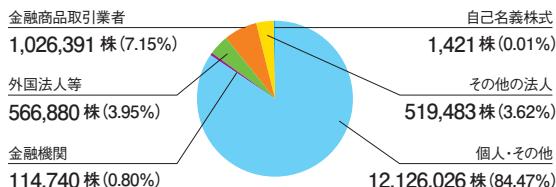
株式の状況 2016年9月30日現在

発行可能株式総数	43,630,100株
発行済株式の総数	14,354,941株
株主数	12,063名

大株主の状況

株主名	持株数(株)	持株比率(%)
株式会社SBI証券	395,400	2.75
松井証券株式会社	222,000	1.54
株式会社ムトウ	160,200	1.11
BNYM SA/INV FOR BNYM FOR BNY GCM CLIENT ACCOUNTS M LSCB RD	159,600	1.11
マイルストーン・キャピタル・マネジメント株式会社	153,059	1.06
黒木作	146,400	1.02
BNY FOR GCM RE GASBU	137,800	0.96
原田育生	120,500	0.83
日本証券金融株式会社	113,300	0.78
上永智臣	108,400	0.75

所有者別株主分布状況



役員 (2016年10月1日現在)

代表取締役社長	福永 健司	常勤監査役	鳥巢 宣明
取締役	山村 研一	監査役	佐藤 貴夫
取締役	北島 俊一	監査役	光安 直樹
取締役	山本 健一		
取締役	船橋 泰		
取締役	清藤 勉		

株主メモ

証券コード	2342
上場市場	東京証券取引所 マザーズ
上場年月日	2002年12月10日
事業年度	毎年4月1日から翌年3月31日まで
定時株主総会	毎年6月
基準日	定時株主総会・期末配当 毎年3月31日 中間配当 毎年9月30日

株主名簿管理人 特別口座の口座管理機関	三菱UFJ信託銀行株式会社
同連絡先	三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部 〒137-8081 東京都江東区東砂七丁目10番11号 TEL: 0120-232-711 (通話料無料)
公告方法	電子公告(当社ホームページに掲載) ※事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告を することができない場合は、日本経済新聞に掲載して行います。

IRのお知らせ

最新トピックスやホームページの更新情報などを電子メールでお知らせしています。
ご登録は当社ホームページにて受け付けています。

<http://www.transgenic.co.jp/>

当社のIR活動についてご意見・ご感想をお聞かせください。
下記アドレスへのご連絡をお待ちしております。

ir@transgenic.co.jp